

【特集】 遺伝看護専門看護師の活動紹介

遺伝看護専門看護師としての実践活動

御手洗 幸子
NTT東日本関東病院

I はじめに

2019年2月10日（日）、遺伝看護専門看護師誕生を記念して、「遺伝看護記念講演会」が慶應義塾大学信濃町キャンパスで開催された。本講演会では、日本遺伝看護学会開設の経緯、遺伝看護の実践、遺伝看護専門看護師の誕生においてのこれまでの経緯を含めた、遺伝看護の実践と研究、教育を拓いてくださった諸先生方のご講演と続くプログラム構成であった。それぞれのご講演内容は、後に控える遺伝看護専門看護師として登壇の機会を得た我々の心を熱くした。同時に遺伝看護の実践を担う者の1人として、バトンが手渡された気持ちを新たにし、身が引き締まる思いであった。あの時から早、3年が過ぎた。

初代という言葉がついてまわる遺伝看護専門看護師の認定を受けてから、遺伝看護における高度実践看護とは何かを問われ、臨床現場において、遺伝看護専門看護師として挑戦できる立場にあることが、有難いことであることを実感し、今に至っている。それゆえに今後、遺伝看護専門看護師（以下、GCNSと略す）が担う、高度実践看護家として、6つの役割機能を持ち合わせた実践活動の在り様を現時点でまとめる機会を得たことに感謝し、これまでの実践活動の一部を振り返る。

II 組織の中で遺伝看護専門看護師として活動する

日々の臨床現場内での看護実践活動の中で、看護職の1人として、目の前にいる患者や家族に触発されて看護を行う場合と、専門看護師として介入する場合の違いについて、模索する日々が続いている。

それは、近い視点と俯瞰が行き来する往復運動(井

部, 村上, 2019) と言われているように、GCNSである私が置かれた立場と役割機能を駆使し、症例に向き合うために、限られた時間の中で、あるいは内省する時間の中で、留まることのない思考の循環が続いていることを指す。

遺伝医療の専門部署が元々ない組織の中で、GCNSとして活動するのは、同時に私自身が看護主任であるという組織内の立ち位置の中で、専門看護師としての振る舞いも同時に期待された中での活動であるように感じている。次の2つのテーマを通して、GCNSの実践活動の一部を振り返る。

1 実践の方向性を決めた研究と専門職への教育的支援

大学院の上級実践コースの課題研究から端を発し、修了後に完成した、「出生前検査におけるDecision-Guideブック」(御手洗, 2017) は、これまでの周産期医療での実践と意思決定支援を、キーワードとした研究実践や、エビデンスの融合が、看護実践の状況に投影された成果として形になった、と感じている。そして、妊婦とパートナー、家族への直接的なケアの実践に繋がっただけでなく、研究活動以前において、当事者とのパートナーシップの形成について、当事者が抱える多様な価値観や背景があることを学び、支援について考察し、患者家族の参画といったパートナーシップの構築の重要性を得ることにつながった。妊婦とパートナーの極めて個人的な事情に一步踏み込んだケアにつながり、実践をカルテに残し、スタッフへの事例検討を通して行った、直接的なケアを可視化した。同時にケアに当たる助産師らの不安を丁寧にくみとり、ケアの方

向性を時に示し、本来行ってきた助産のケアをよびお越し、元々持っている力を承認した関わりを心がけることで、出生前検査後の選択的中絶ケア等について共に支援を考え、実践に役立つ支援を行うことにつながった。

冊子作成の副次的な効果として、ケアに携わる看護職、助産師への教育支援ツールとなった。冊子の作成過程を示すことは、批評的な視点で助言を得た同時に、直接的なケアをやって見せることにつながり、結果的に看護の質の向上に貢献する契機となった。また、自身の実践活動を説明する1つの手助けともなった。

他に、多職種協働を行う中で、専門領域を超えた他職種に対して、自身の実践活動を説明する際に、看護職の役割や専門看護師の活動について述べるために役立つ資料となった。それは、意思決定支援は全ての領域と医療に携わる職種において必要な支援であり、看護においては高度実践看護の一つとして位置づけられていることを説明し、理解を得る上でも役立てられた。後に、がんゲノム医療連携病院としてチームビルディングを図る上で、GCNSが看護職として、役割を担う必要性について説明する際に役立てたと思う。

2 チーム医療での協働と気づき

2018年4月国策として、がんゲノム医療中核拠点病院の連携病院として、GCNSの立場で体制整備の構築に携わることができたのは、看護部と多職種の協力・支援が大きな推進力になった。GCNSとして、がんゲノムプロファイリング検査やコンパニオン診断に関する体制を整備する中で、遺伝性腫瘍に関するケアの重要性を同時にアピールすることができた。通常の検査と異なり、がんゲノム医療は、患者を取り巻く診療科が領域横断化すること、医療職だけでなく、臨床データを入力する者や、煩雑な事務作業を担う者を含むため施設内のチーム力が問われることを説明することが出来た。何よりもチーム医療を担う看護職が、遺伝医療において全人的なケアを実施する上で欠かせない存在であること、がんゲノム医療が多職種協働なしには成り立たないことを実践

活動をしながら示すことに繋がったと感じている。

患者と家族にとっての新しい医療（この場合は遺伝学的検査やがんゲノム医療）へのニーズは、看護職を始めとする多職種にとっても新たな課題を負うことになり、支援が薄くなりやすい。この支援が薄くなった部分が医療者にとっての必要なニーズと捉え、GCNSが介入する道筋を示す中で、実践と同時並行で思考しながら患者と家族をキーワードに看護職同士、他職種同士と対話を重ね続けている。

GCNSの活動において、管理職の協力は不可欠であり、実践の見える化が、活動を持続可能なものにするためには必要である。がんゲノム医療においては、がん医療と遺伝医療のそれぞれの側面があるが、看護実践においてはこれまで実践しているがん看護となら変わることがないことを示していくことが重要となる。その上で、遺伝という課題に患者や家族が向き合う場面になった際に、必要なリソースの中に、GCNSが存在することを施設内の看護職を始めとする多職種に認知され協働する一員として理解されることが重要となる。看護職が、患者と家族の新しいニーズに対応するために、GCNSは言葉を尽くして説明し、不安や困り事に丁寧に対応しながら、本来の看護の本質と変わらない実践があることに気付き、勇気や安心感を実感できるような関わりを心がけている。その結果として、看護実践の質の向上の一旦を担うのを目指すところである。

III まとめ

GCNSがこれからも増え続けることが大事な課題の一つであると同時に、遺伝看護専門看護師の高度看護実践家の看護職としての真価が問われるフェーズに移ってきていることも事実である。少数であるからこそ、また各々の独自性が見える化している今こそ、ネットワークを大切にしたい協働も持続可能なものにしていきたい。

そして、これらの遺伝看護専門看護師としての院内外での看護実践活動を継続的に支援し、実践活動を認めてくださる所属施設の管理職者の協力と理解なくしては成し得ることができなかったことを、ここに記したい。

最後になりましたが、本企画をご提案頂きご支援いただきました諸先生方、編集委員の皆様にご感謝申し上げます。

引用参考文献

編集 井部俊子. 村上靖彦 (2019) 現象学でよみとく 専門看護師のコンピテンシー. 医学書院. 145-154.
監修 井部俊子. 大生定義 編集 専門看護師の臨

床推論研究会 (2015) 専門看護師の思考と実践. 医学書院

御手洗幸子 (2017) 出生前検査を実施していない施設の妊婦を対象にしたDecision-Guideの作成と評価、母性衛生、Vol.57 No.4 : 643-651

御手洗幸子 (2017) 出生前検査のディジションガイド (支援媒体) の実用化に向けて—出生前検査を実施していない施設の妊婦を対象した実践研究. 第31回日本助産学会誌学術集会収録.